

# 愛媛大学人文学会 公開講演会 「ドイツにおけるジャポニスム」

2019年9月7日(土) 14:00-16:00 法文学部本館 8F 大会議室

聴講無料・事前申し込み不要 問い合わせ先: nomura.yuko.vq@ehime-u.ac.jp (愛媛大学法文学部 野村優子)

講演1: 落合 桃子 (福岡大学人文学部講師)

**西洋近世美術における「アジア」のイメージ——ヴュルツブルクのレジデント「階段の間」天井画を中心に**  
近世のヨーロッパでは、大航海時代による世界観の拡大やカトリック教会の世界的広がりを背景に、四大陸(ヨーロッパ・アフリカ・アジア・アメリカ)を表した絵画や彫刻などが多く制作されています。本講演では、19世紀ジャポニスムの「前史」として、16-18世紀の西洋美術における「アジア」の表象について、ドイツ・ヴュルツブルクのレジデント「階段の間」天井画(1752-53年、ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ作)を中心に考察します。

★プロフィール★ 福岡大学人文学部講師。早稲田大学・大学院で美術史を学び、2008-2011年にDAAD奨学生としてブレーメン大学に留学し、C. D. フリードリヒに関する研究でDr. phil.を取得(2015年)。九州産業大学美術館学芸室長を経て、2017年より現職。

講演2: 野村 優子 (愛媛大学法文学部講師)

**ドイツ・ジャポニスムの転換点  
——日本美術商ジークフリート・ビングとドイツ**

19世紀後半のフランスを席卷した日本美術の流行(ジャポニスム)がドイツに根づいたのは1890年代だと言われています。当時フランスでは、絵画中心だった現象が工芸にまで拡大し「アール・ヌーヴォー」という新様式が確立しました。この立役者ジークフリート・ビング(1838-1905)はハンブルク出身の日本美術商です。彼と故郷ドイツとのかわりを追いかけてながら、ドイツ・ジャポニスムにも新たな転換点が訪れたいきさつを見ていきます。

★プロフィール★ 愛媛大学法文学部(表現文化論)講師。2005年より四年間ドイツ滞在し、2009年ベルリン自由大学歴史・文化学部美術史学科卒業後、2017年九州大学大学院人文科学府博士後期課程を修了。同年より現職。専門は近代美術史および日独美術交流史。

